「ワンゲル行軍」大雪山編。

　北海道中央部、でんと、構える大雪山連峰を迂回し、層雲峡へ下る、行軍を強行することに。数日前に、足寄から、中頓別の鍾乳洞を経て、旭川に戻る行軍を終えたばかりだ。道内の各地を行軍して、１０日だ。
　若いとは言え、部員の疲労は、そろそろ、ピークか。旭川から上川へ移動して来た。

「な～、まだ、先がある、層雲峡へは、一泊休んでから、、」旧国鉄上川駅で、地図を広げて、サブリーダーと、ベンチに腰掛、打ち合わせを。

「そやな、疲れた、顔しとるわ～」駅前は真っ暗だが、無数の星灯りが。午後８時過ぎだ。ベンチは一つしかない。皆んな、地べたにグランドシートを敷き、座り込む。それぞれ、寝袋の用意や、装備の点検をしている。その動作が重たい。８月だが、夜は一気に冷え込む、身体が冷えると、疲れは取れないのだ。

「お～い、新聞紙、詰め込んどけよー」サブが、声をかける。寝袋の中へ、新聞紙を詰める、保温効果があるのだ。

「分った、明日は、バスで、この温泉まで行こう、そこで一泊して、安足間岳から縦走して、、な、これで、行けるやろう」上川から、安足間岳への五合目付近に、温泉があった。山小屋か温泉宿か、が一軒ある。駅前から乗り合いバスが出ている。

「よっしゃ、了解！」サブが立ち上がり、部員に集合をかけた。

「明日は、バスや！、温泉で休養できるぞう～」

「うお～っ！！、やったー！、パチパチパチィー」疲れた顔が、笑顔と拍手に変わった。翌日、午後３時過ぎの、バスに乗り込み、山小屋風の温泉宿に着いた。他に、乗客はいない。ボンネットバス１台が、やっと通れる地道の道路を、繁茂した、雑木林が何度も、バスを撫でるのだ。その都度、部員達が騒ぐ。

「うちらだけやな、挨拶しとこか」サブと二人で、宿主の元へ。

「山小屋兼温泉宿です」と、主は笑って答えてくれた。〇〇大学ワンゲル部であること、道内を１０日間行軍してきたこと、で、明日の行軍計画を。

「そうですか、遠い所をご苦労様です、ゆっくり骨休みして下さい」ご夫婦で運営している。五

十がらみの、ガッチリした人であった（山男やろな～）。サブが部員を点呼し、総員異常なしを確認。

「〇〇、報告終わりや、温泉入ろか？」消灯の９時まで、部員達は自由時間となる（１０日間ぶりの、開放や、明日は元気になりよるわ）。

翌朝、狭い、宿舎前に装備、点検を終え、部員全員が集合。宿主ご夫妻が見送りに。静寂に囲まれ、和やかな、空気が流れる中。腕時計を見た。

「〇７、〇２（午前７時２分）、出発！」

「おせわになりましたーっ！」ご夫妻に、全員で、答礼。部隊旗を腰に巻きつけ、キスリングを確かめ、肩を回し、先頭を行く。一人一人を、目で追うように、ご夫妻が。

「お気をつけて～」手を振り、会釈しながら、後に続く、部員達それぞれに。温かい、声をかけてくれる。サブリーダーが最後尾から。

「ありがとう、ございましたー！」声を上げたのが、聞こえた。山道は取り付きから、生い茂る藪の中だ。枝葉が顔に当たる中を突入。安足間岳を目指す。背後から、規則正しく、靴音が、野鳥の声と溶け込んで。行軍開始から、およそ、２時間。藪が途切れ、低木に変わった。底が抜けたように、青空に晒された。右手を挙げ、小休止の合図を。

　前方に、剥き出しになった、岩肌が見えてきたのだ（急坂やな～、迂回ルートもなさそうや）。地図を確かめ、行軍を開始した。先人が踏みしめたのだろう、足場はしっかりしていた（これ、辿って行ったら、いける）。が、登攀は意外に苦戦。体力差がモロに出て、部員の数だけ、少しずつ間隔が開き、遅れ始めた。

「伝令、伝令、でんれいー」押し殺すような、声が届き、一枚の紙が、リレーされてきた。最後尾のサブリーダーからだ。行軍中は私語は禁止である。大声も、だ。張り付いた、岩場で、サブから届いた、紙切れを受け取った。

「一人、負傷、足を痛めた」と、書かれてあった。右手を大きく振って、隊を止めた。一人を手招きし、ロープを取り出し、岩を突き破って、力強く生きている、木に括りつけ、リレー式に、

後方へ送る。たるんだ、ロープが線になった。最後尾が、ロープを確保したのだ。ロープを両手で掴み、足場を固め踏ん張る。

「よっしゃー、行けー」一人ずつ、先に、急坂を登攀させる。部員が、次々に、追い越して急坂を登って行く。ロープが揺らされた。サブが負傷者を確保した、とする合図だ。登りきった部員から、ロープが投げ込まれてきた。サブが負傷部員を後押ししながら。

「〇〇、ロープ、たぐってくれ」言い置いて、そのまま、いま、投げ込まれたロープを負傷部員に巻きつけ、引き上げるよう、上にいる部員に合図を送った。

「ＯＫ」手繰り寄せたロープの先端に、負傷部員のキスリングが。見あげると、サブが、登りきったと、合図を送ってきた。キスリングのロープを付け替え、合図を。引き上げられる、キスリングと、歩調を合わせ、登攀した。登りきると、なだらかな、尾根道が開けていた。負傷部員は、左足の踵に靴擦れができ、皮が剥けていた。

「どうや」、「大丈夫です」答えるが、靴を、履ける状態ではない。サブリーダーを呼んだ。

「うん、あいつやったら、大丈夫やろう（部員きっての頑健派だ）」負傷部員を支える者を選び、彼等の、キスリングの荷物を、全部員で分担させることにした。部員１人当たり、２０キロ前後の荷物を、背負い込んでいる。

「よ～し、〇〇君、〇〇（負傷者）についてくれ、全員で、二人のキスリングをバラし、分担せー」

「はい、了解！！」部員達は、二手に分かれ、機敏に動いた。こういう訓練は、何度も行っているのだ。二つのキスリングから、荷物が取り出され、手際良く、それぞれの、キスリングに分担させた。地図を睨み、サブと行軍の再確認を行った。

「安足間岳は、この尾根道伝いで、もう直ぐやな」サブが。

「そこから、黒岳石室までも尾根伝いやな～、山頂で、ながい、せ～へんかったら、層雲峡へは、予定通り下れるやろう」

「ああ、日の入りまでには、下っときたいな」（この男は慎重や、薄氷を踏むようなことは、絶対しない）。

「よし、最後尾につくから、おまえ、負傷者と、先行してくれ」部員達が、整列を終え、出発の合図を待っていた。

「了解！。よ～し、イチ、イチ、ニイ、ナナ（午前１１時２７分）出発」腕時計を見、行軍開始を告げた。万年雪を頂いた、大雪山連邦の主峰、朝日岳を右手に眺望しながら、緩慢な尾根伝いを、ゆっくり、行軍。低く、山に這い蹲る深緑の草木を、分けるように、一筋の尾根道が続く。左手に先端が尖った比布岳らしき、山が見えてきた。先頭を行っていた、サブリーダーが、大きく右手を揚げ、左右に振っている。

「ん、安足間岳（標高約２２００㍍）山頂か？」尾根道が、踊場に広がった所が、安足間岳山頂であった。

「イチ、ニイ、イチ、キュウ（午前１２時１９分）、これより、２０分間、昼食休憩！」踊場で待っていた、部員に。

「はい！！、、、うぉ～」笑顔が拡がる。

「先輩！、パノラマですよー」部員達は、禁黙からの解放に、それぞれに、喋りだす。四面、天地は青、緑、白、茶の原色が、人工では描けない配分を、見せてくれるのだ。

「集合！、整列！」部員を見渡し、声をかけた。写真を撮ったり、景色を眺めたり、の談笑が、ピタリ止まった。

「はい！」勢い良く、立ち上がった、サブリーダーが、隊列を整える。慌てて、こけそうになる者も。

「イチ、ニイ、ヨン、イチ（午前１２時４１分）」時間を告げる。

「サブ！、負傷者と先行してくれ、出発！」右手を上げて、行軍開始を。サブと負傷者を先頭に、部員達が目の前を通り過ぎて行く。最後尾についた。緩やかな、尾根道を、黒岳石室へ向かうのだ。風向きが、変わり、南風が頬に。青天だが、少し、湿り気を感じた（雨、きよるかも）。

　ゆったりした尾根道。左右から、吹き上げる風が心地よい。部員達も、感じているようだ。歩調が安定している。比布岳が視界から消えた。２０００㍍級の山々が、次々に現れる、眺めながらの縦走行軍である。

　視界が大きく開け、大雪山主峰の朝日岳が、くっきりと現れた（書割みたいやな～）。十勝平野は霞んで、見えない。サブリーダーも気づいたようだ。隊列を止めた。部員達が雨具（ポンチョ）を装備し始めた。いつの間にか、尾根道が、もやってきた。

「サブリーダーからの伝令です」紙切れが回ってきた。

「前方、黒岳確認」折り返し、紙に。

「雨がくる、一気に踏破」書き送った。直後、尾根が灰色に覆われ、霧雨が。山の天候は、瞬時に変わる。雹が混じったような、雨。部員達のポンチョが、音を立て始める。

「パチ、バシッ、パチ、パチ、パチ」風も少し、強く吹き上げてきた。視界が急激に、遮られ、狭まった。尾根道は、幅員にもゆとりがあり、下から上昇してくる風だ。縦走行軍に差し支えない、と判断したのだ（横風に変わらん限り、黒岳まで、距離を稼いどかな、尾根道での立ち往生は、危ないからな～）。

「ガスッてきたら、、、（自然が相手だ、懸念は何時も、頭を過ぎる）」サブリーダーも、同じことを、感じたようだ。行軍のテンポを、少し速めた。黒岳を視認している、この程度の速度なら、安全だと、ふんだのだろう。ガスる前に。

　小雨から、本降りになった。視界が数㍍に。幸い、風は強くない。前を歩く部員に。

「足場確認！」を指示。リレー式に、自分の前を行く、部員達に伝えられていく。雨中の縦走行軍である。ぼんやりと、前方に岩陰のようなものが。

「黒岳か？」先頭から、波のように、呟きが、伝わってきた。

「着いたぞう、、、」数分後。黒岳石室に到着した。岩石に囲まれ、数組の登山者らの声が聞こえる。トーチカのように、巨岩を組み合わせた、建物が。黒岳の石室である。キスリングを下ろし、腰に巻き付けていた、部隊旗を外した。サブを先頭に、部員達が石室の前で整列。中から、二人の部員が駆け寄ってきた。

「部隊旗､掲揚！」と、手渡す。受け取った、部員らが、旗を掲げ、広げる。他の登山者等から、声がかかり、拍手が。

「おつかれさ～ん、パチパチパチ」

「イチ、ヨン、ニイ、ナナ（午後２時２７分）、総員到着、礼！」部員達が、一斉に、声を挙げた。

「ありがとう、ございます」登山者等に向かって、返礼。

「２０分後、集合、解散！」雨は、止んでいた（不思議なもんや）。呟きながら、負傷者を囲ん

でいた、サブらの元へ。

「〇〇君、どうや？」

「はい、痛みはありません」靴擦れ箇所は、しっかり、固定され、早めの手当てが、奏功したようだ。改めて、手当てを、し直すよう、指示。層雲峡を下れば、今回の行軍計画は全て終了。負傷者をバスで降りるよう、指示したが、本人も、サポートしていた頑健部員や他の部員達が。

「一緒に、行軍させてやってくださいー、お願いしまーす！」サブも。

「大丈夫や、根性で行きよるわ」と、笑う。日が落ちるまでには、充分時間がある。歩調４～５㌔（時速）のペースで、下れる、と判断（ん、支障ないやろう）。部隊旗を、襷がけし、先頭に。

「イチ、ヨン、ゴウ、マル（午後２時５０分）、出発」層雲峡を下った。午後５時２４分、全行軍予定を終了した。